

岡本歌乃子文學與無常觀

王淑芬

大仁技術學院講師

中文摘要

「無常」是與「常住」相對立的一個概念。在佛教的世界觀中，因緣所生的一切的事物是不停止的，是隨生生滅滅流轉的。唯種種的因素、條件合疊，各種事物之現象方可成立。如此看待世界的方式又稱之為「因起觀」，無常觀即是因起觀的延長線。

在六世紀傳入日本的佛教的無常觀，和日本的文化、文學、藝術有密切的關係，無論是中世、近世，以及近代，許多詩歌，小說、散文等文學作品，皆受無常觀思想影響。

本論要探討的是近代著名女流作家岡本歌乃子，他深研佛學，深受佛教思想影響，在其眾多傳世小說作品中，亦充無常觀。岡本歌乃子出生於豪門之家，生活優渥順遂，在他人眼中，其人生觀應是至為樂觀積極的，然且因為其性格頗為自負、驕恣，因且對世事的反應都比一般人強烈。

接觸佛教之後，他有自己對世事、無常的解釋，透過其無常觀，方可探究他畢生經營的文學創作之真諦。

かの子文学と無常観

王 淑 芬

大仁技術学院講師

要 旨

「無常」は「常住」に対立する概念である。因縁所生の一切の事象は絶えず生滅流転するという仏教の世界観である。あらゆる事象はそれ自体の力によって存在し得るものではない。種種の原因、さまざまな条件が重なり合って、個々の存在や事象が成り立っている。そのように原因や条件の集積によって一切が成り立つとする見方を因起観と呼ぶ。無常観はこの因起観の延長線上に現れたものにほかならない。

そこで女流作家を考えてみるに、歴史において最も抑圧された女性も、明治以降には徐々に近代文壇に頭角をあらわし、いろんな身の素材から題を取り、それを文学表現という形で社会に訴えたのである。とくに、三つの瘤を持つと自称した岡本かの子文学にも、この中世からずっと日本文化・文学に影響を与えてきた無常という概念をその作品の随所に見ることができる。しかも、彼女の人生の無常についての体験は、当時では異色的な存在であり、特に彼女の取った言動や行為などは、一部の文学者の聳聳を買ったぐらい激しく、彼女は独自の道を歩み、川端康成が言うように、彼女の文学は「文化から生まれた」と言われるまでになり、ついに彼女は日本の伝統的な文化—佛教の無常観—をその作品において表すことが出来たといえよう。

キーワード： 無常観 業 諸行無常 日本文学 意識 因縁

The Literature of Kanko Okamoto and Evanescence

Wang, Shu-Fen

Instructor of Tajen Institute of Technology Department of Applied Foreign Language Lecturer

Abstract

“Evanescence” and “eternity” contradict each other. In the Buddhist view of the world, things produced by different causes are incessant, because they are always in the process of becoming. Only through various combinations of causes and conditions can phenomena be formed. This is a view of “causes,” which entails the view of “evanescence.”

Introduced to Japan in the sixth century, the Buddhist view of evanescence is closely related to Japanese culture, literature and art. Many poems, novels, and essays through the middle, modern and contemporary ages are influenced by it.

This thesis aims to discuss the works of 岡本歌乃子, a famous modern female writer. She studies Buddhism and is deeply influenced by the Buddhist thought. We can find the view of evanescence in many of her novels. Since she was raised up in a noble and rich family, people suppose that her view of life should tend to be active and optimistic. In addition, she has a very high opinion of herself; she then appears more sensitive than others.

Nevertheless, after contacting Buddhism, she has her own interpretation of the world and evanescence. Only by observing her view of evanescence may we explore the essence of her literary creation.

かの子文学と無常観

王 淑 芬

大仁技術学院講師

一、はじめに

医学には遺伝学という学科がある。つまり、われわれのからだの形や性質などは両親、更に祖父母から伝わるものである。しかも、メンデルの法則というオーストラリアの植物学者が遺伝についての実験的な研究を行なって得た優劣の法則によって遺伝が決まる。これは生理学的な遺伝の法則であるが、人間社会における文化・文明の伝承もまた動物の遺伝の継承に似たものであることが言えよう。即ち昔の物、特に伝統的なものは、すでに民族の体質や血肉をなし、古代から中世、近代へと代々伝承してきた。そして生物学における遺伝子の組換えによる新品種の登場は、あたかも人類社会における文化・文明の継承における伝統的な宗教や習慣や思想が、現代的なもの、新しいものとの相乗によって近代文化の再生を遂げ、そして日本の中世文学・近代文学、現代文学、又日本文化の基調や底流となし、更に近・現代文学のその後の発展にも影響を与えつづけてやまなかったのである。

たとえば、中世文学の『平家物語』を例にとると、この『平家物語』における。「無常」は作中を一貫する主題であった。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」と説き始め、本文の展開で源平双方の武将たちのさまざまな死を描き、最後に灌頂巻を置き、建礼門院の出家生活を描き結びとしている。建礼門院は清盛の娘として生を受けた。清盛の権勢をバックにして天皇妃となるが、まもなく夫高倉天皇と死別、父清盛も病死、平家

の敗北とともに西海に通れて各地を転々し、挙句の果てに実子安徳天皇、実母二位尼時子（清盛の妻）の入水を目の前に見届け、その他の兄弟知友多数を失って、親族のまったくいない、天涯の孤児となってしまった。つまり門院はいったんは皇妃・国母の極位に立つが、たちまちどん底の逆境に突き落とされ、諸行無常、盛者必衰を身を以って体験した人として『平家物語』には位置づけられている。ここに『平家物語』が門院をそのように位置付けたこと自体、すでに無常を重大な核として構想していることを明快に物語っているといえよう。

「無常」は「常住」に対立する概念である。因縁所生の一切の事象は絶えず生滅流転するという仏教の世界観である。あらゆる事象はそれ自体の力によって存在し得るものではない。種種の原因、さまざまな条件が重なり合って、個々の存在や事象が成り立っている。そのように原因や条件の集積によって一切が成り立つとする見方を因起観と呼ぶ。無常観はこの因起観の延長線上に現れたものにほかならない。諸条件の集積によってすべてが成り立つならば、条件が一つでも欠けたり変化したりすれば、すべては崩壊したり、消滅したりしなければならない。仏教にはこの縁起観に加えてもう一つ、あらゆる条件は時間的推移とともに絶えず離合集散するという前提があり、これが縁起観と結びつくことによって、あらゆる存在は絶えず流動変化するという無常観が導かれるのである。

無常観は以上のようにきわめて単純な原理というべく、決して複雑難解な思想ではない。しかしそれは生死の問題と密着しているだけに、一人一人が主体的に受け止める段階になると、俄然重大な問題性を帯びてくるのである。

この無常の受け止め方は大別して二つの類型がある。一つは体験を通じて無常の理法を認識し、否定的に容認するタイプ。これは人々の生死や権力の消長を身近に体験することによって、無常が避けることの出来ない理法であると消極的に受容する型である。こうした受容は過去の体験を振り返って獲得するだけに、反省や回顧的性格が強く、死や衰亡という悲劇と密接しているために、詠嘆や感傷の色あいを

強く含んでいる。これに対して体験の有無にかかわらず、無常を絶対的真理として積極的に摂取しようとするタイプがある。この世は無常だからこそ求法や悟道が存在するとして、無常を悟達への手段とみなす型である、このタイプは強烈な信仰を貫いている人に多く、過去の回想や反省に代わって、将来の得脱や往生を期待する姿勢が強い。『平家物語』は源平合戦が終息した段階で、それらの体験を回想しつつ形象化したものである。義仲・維盛・敦盛・重衡ら多くの死の場面が描かれるが、常に詠嘆や感傷に満ちているのはそのような無常摂取に必然として存在する特性だったと見なければならない。従って『平家物語』は前者に属するということができよう。そして後者に属する無常観の持ち主には多くが宗教の道に悟達した高僧や宣教師らが始めて達することが出来るのもであろう。そして、普通一般の悲観的な・更に消極的な人生を送っている人たちとは無縁のものであろう。なぜなら、人間は往々にして過去の回想や反省をした上で無常観という一種世人に多い悲壯感が潜む結果となる。

また、仏学に精通した幸田露伴は、明治二十七年にチブス罹患によって瀕死の病床体験をし、死生の巷をさ迷うことから、生死の無常観を痛感した。深刻な無常の観念からあらゆる種の悟道の境地にまで辿り付いた彼の文学精神には、仏教的な深化の心得が加味され、それによって露伴の『風流微塵蔵』という傑作ができあがったのである。そして、キリスト教に情熱を持つ北村透谷も『蓬莱曲』に浄土信仰という一種の往生思想に似たものを作品の中に提示している。かように、仏教宗教思想に影響された作家は多く、作者は日常生活のうちに素材を求め、自己暴露的（回想）文学としての私小説と宗教的心境性を基調とした心境小説は宗教気味にあふれた文学である。その代表的なものには、志賀直哉の『城の崎にて』や『暗夜行路』にはその生死に対する無常の体験、禅的な解脱が文字行間に溢れている。

そこで女流作家を考えてみるに、歴史において最も抑圧された女性も、明治以降には徐々に近代文壇に頭角をあらわし、いろんな身の素材から題を取り、それを

文学表現という形で社会に訴えたのである。とくに、三つの瘤を持つと自称した岡本かの子文学にも、この中世からずっと日本文化・文学に影響を与えてきた無常という概念をその作品の随所に見ることができる。しかも、彼女の人生の無常についての体験は、当時では異色的な存在であり、特に彼女の取った言動や行為などは、一部の文学者の輦蹙を買ったぐらい激しく、彼女は独自の道を歩み、川端康成が言うように、彼女の文学は「文化から生まれた」と言われるまでになり、ついに彼女は日本の伝統的な文化—佛教の無常観—をその作品において表すことが出来たといえよう。しかし、これは前記仏教観に基づく二種のタイプの前者に属することは言うまでもない。

二、かの子の「業」

文芸是純粹的生命表現。文芸是完全擺脫外界的压抑強制，唯一立於絕對的自由的心境而表現個性的世界。拋棄名利，脫離奴隸根性，從一切羈絆束縛上解放出來，然後成為文芸上的創作^❶。

近代日本文学は束縛から解放された自我意欲表現の文学であり、これを生命表現の文学と言うことが出来ようが、これを主題とした文学は当時の女流作家には大変な勇気がいることであった。自由な生命の解放力をとどまることなく追及することと、人類の創造力を強化する傾向は、近代に入ってからのものである。したがって、近代文学は、さまざまな伝統道徳、社会拘束などとの衝突、抗争の上に構築され、また人間の潜在意識に潜んでいる生活に対する苦悶や苦悩は近代作家の最たる「ため息」であった。

❶ 厨川白村 『苦悶の象徴』（中国語訳版 林 文瑞訳）志文出版社 一三頁

豪家に生まれて箱入り娘として育った岡本かの子は、生活に何の不自由もまったくなく、そして、日本文学史上にユニークな作家として大成するかの子が、小説として文学を開花する境地に達するのには、彼女が自己主張してやまない、いわゆるつらい「修業」を経験し、乗り越えて始めてなしうることである。世間知らずのかの子は、特に人一倍の苦難をなめたことであろう。

（前略）人間として一ぱん原始的で本能的な問題である生の目的、死後の生活、幸福とは何かを解きだせば、縷縷尽きせず、しかも網の目のように連貫している厄介な問題である。これを文学以前として、閑却出来る文人もあるが、私にはどうしてもそうかたづけて置くことが出来なかった。こう悲華落葉を私に感じさせるには環境の事情もあった。^②

ここでかの子独自の解釈によるの無常という観念について更に掘り下げてみると、おおよそ「無常」という観念は、それを誰もが最初から悟り、理解したものではなく、「薰習」を経て始めてわかるものであるということだ。彼女も例外ではなく、病床で夏目漱石の「則天去私」と尾崎紅葉の「興不尽、寿尽」という世の中の無常を描いた作品に接し、生命に対して彼女独自の意境に達したものであった。これはあたかも『平家物語』に現れた「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽」の無常観に似ている。したがって、まずおのれが救われるようになったら、人に作品を残すその残し甲斐があると考えた彼女は、「生命は体験を通して、象徴的手法で、具体化できる」という「自作案内」にも似た心得のようなものを書いた。

世の中の無常の規則は人間が生まれてから、一刻もとどまることなく、進んでいくものである。にもかかわらず、人間としてのわれわれは、無常観がわかるように

② 岡本かの子 『岡本かの子全集 第十二巻』 ちくま文庫 一八三頁

なるには、挫折や困難や不遇に遭ってからしみじみ思うものである。しかも、

無常に我が身をまかせ、無常になりきって生きるということは、もとより容易でない。いささかなりとも執着の気配が心中に宿るなら、無常になりきることはまったく不可能である。^③

人間はそれぞれ生への、あるいは社会への執着心の強さによって、無常観に対する感じ方が異なってくる。それは一言で言えば因縁であり、業力であったのだ。

命は先天の命と後天的な命と二種類ある。生まれつきの賢さ、気質、容貌、家柄などは先天の命である。さらに、これらは皆前世の因縁によるものである。後天の命は現世の因縁の作用によるのである。後天現世因縁は我々の容貌、家柄などに影響しうる。^④

岡本かの子の生まれつきの文芸に富む才能と後天的文芸に対する執着心は人より抜きん出ていたもので、彼女の一生で、終始家・兄の影響を受け、更に文学との出会いで如何にそれを完結するかの執着心が、彼女をしてなりふりかまわず文学に取り組ませた精神力を生み出した。彼女にとって文学とは何ものにも変えがたい存在であり、たとえば文学のためなら最愛の一人息子をヨーロッパに残して芸術の修業をさせ、しかも、女史の死ぬ間際にも息子とはとうとう一度も顔を合わせるチャンスがなかった。かの子は小説、息子は芸術を目指すために、息子への思いをしのび、人生の別れの無常を承知していたからこそ、彼女は全精神を文芸作品に託し、

③ 西田正好 『無常の文学』 塙書房 二二五頁

④ 楊 敬豊 『仏学と哲学』 頂淵文化事業出版 六二頁

『母子敘情』などの作品を書き上げた。その気持ちを夫の一平もくみ、太郎への手紙に

タゴシ（岡本太郎の事）よ、君に逢い度い逢い度いと思う心が突き詰めた時、おかあさんの現象よりも抽象の「業」に到着し、「業」のおかあさんを君の「業」の中へ取り入れてしまったのではあるまいか。（中略）お母さんは眠前に嘗ていった「太郎には太郎の生涯がある」と。お母さんは君を突き離し、君から離れてこんなことがいえるおかあさんではない。おかあさんの潜在意識は、業感^⑤は、寧ろ君と共に確実に在り得られることを絶対に信じ切った故に、こういい切れたのだ。^⑤

自分の分身のような息子との別れの苦しさは、母親にとっては何よりもつらいことであるが、この別れの無常や試練に遭っても彼女の文学に対する執着心は聊かも衰えるようなことはなかった。更に、「家から受け継いだ業」も彼女に煉獄のような試練を与えた。彼女の作「老主の一時期」には、祖先に現れた無常変転の状態を基調として、祖父の運命に対する慟哭というくだりを描いたものであるが、避けられない旧家にまつわる業については、「雛妓」の主人公逸作が「わたし」に

（前略）家霊は言ってるのだ一私をもし私の望む程度にまで表現して下さったなら、私は三つ指ついてあなた方にお叩頭します。あとは永くあなた方の実家をもあなた方の御子孫をも護りましょうーと。いいか。苦悩はどうせこの作業には付きものだ。俺もできるだけその苦悩をば分担してやるけれど、おまえ自身決して逃れてはならないぞ。^⑥

⑤ 岡本太郎 『母の手紙』 チクマ秀版社 二四七頁

⑥ 岡本かの子 『岡本かの子全集 第六巻』 ちくま文庫 一五〇頁

と悲しそうに言っている。また、「生々流転」には

諸行無常を、人世の矛盾を、生の疲れを突き詰めてみたり、中にぼっこりは
まり込んでみたり、時によっては全く抛って忘れてみたり、私は心を謎に住
まわせしめているつもりでも、われ知らぬ求覓の歯はわたくしの必死の努力
如何にも係らず、昼夜休まず働いてこれ等の対象の事実を噛み進み行く事は、
折返して歯尖を觀照する謎の心も噛み込んで行く作業をいたします。かくて
わたくしはいつの間にか一つの心田の素地に行当たっていたのでした。

ああ、歿き父のさずけたいのち、歿き母かがずけたいのち、うつし身のまま
霞を距てて負担を負わされている感じの安宅先生や池上、葛岡の不如意のい
のちも、この心田に入る場合には自他を無にし、不如意も如意もございませ
ん。滔滔として天地と共に流れている卓犖不羈の大河の流れと知られ、歪め
ば歪んだなりに直ぐ、切ない痛苦は痛苦のままにして、息詰まるほどの快樂
でもございましょう。趣あるかな水中の河、その河身を超越の筏に乗り、同
死同生の水棹で掻き探る時、掻き寄すれば歿き父以下数脈のいのちの流れは、
私の一筋のいのちに入り、放つとき、わが一筋のいのちの流れは彼等の数脈
の中に融け入ります。

「謎々、なあに、照る日にからかさ」^⑦

この昔から現在、また未来へと続く「業の無常」か「無常の業」かが、彼女には
付きまとって離れない。それは「家」に起因する負担であり、重荷であった。亀井
勝一郎も「川の妖精」に岡本かの子の「いのちの川」に流れる業について以下のよ
うに説明している。

⑦ 岡本かの子 『岡本かの子全集 第七巻』 ちくま文庫 四〇〇頁

旧家にまっはる深い「業」ともいへるかかる所作は、しかしいかなる憂愁とともに在ったか。生命の川に漂ひつつ、諸々の生きもののいのちを食う刹那に、救ひはあったかもしれぬ。が、刹那の救ひに貪婪なものは永劫の地獄に生きねばならぬ。永遠の青春は永劫の地獄である。川のもつ宿命的な無常観は、生れながらにして氏の血液の中に流れていたのであるが、救ひのないその寂寥と痛苦の叫びは、妖艶な焰と表裏し暗澹たる悲歌を奏でる。⑧

世の中の無常、人間の持つ業の遍歴は、彼女をして旧家から受け継いだ業を文学創作に向け、そして兄との約束である文学を芸術として出世することを果たした。彼女が当時の女流作家と異なるところは、文学芸術を開花成功させるためには人のいのちを食ってまでも、そして人の命を犠牲にしてまでも芸術を開花させたかった。そこには他人の命の存在はなく、まさに何事にも物怖じしない「芸術の餓鬼」としての業があったからこそ、この業を貫徹するために、他人の誹謗や譴責は彼女には何ら感ずるものではなく、それこそ他人の命は彼女の文学創作の栄養であった。そして、たとえ人のいのちを食り、犠牲にしたとき、これは人々が持つそれぞれの業の因縁にあるとかの子は考える。

かように文学作品に執心した彼女の人生もわずか四十年に過ぎなく、彼女の業はついて回った。その影響か、作中の人物はほとんど底のない深淵に陥りつつ、かすかなうめき声にも似たため息を漏らすものが多かった。

⑧ 亀井勝一郎 「川の妖精」 『岡本かの子全集 別冊二巻』 冬樹社 二六頁

三、かの子の無常感

人間は捉われ易い因習的な概念を破ってから、みずみずしい生命感を浴びさせようとするものでありますから、一度どうしても、因習的な概念を粉々に粉碎してしまう必要があります。その方式として無常観というものが与えられます。「現象的な存在には恒久性がないものだぞ」。この概念によってかの子の概念を打ち消します。^⑨

「ままにならぬは浮世のさだめ」、ままにならぬということは何であるのか、大地主の娘として育ったかの子にはわかり難いものであった。けれども、人間がこの世に生を受け、それぞれの薫習を経験し、生命を体験しなおして始めて無常観に対して悟るようになり、始めて世の中の事は皆それぞれが「常」に変わらないという事はないと悟るに至るのである。だが、無常は誰もが感じ、いわば一種の自然現象であるものの、彼女の無常観には他人にはない一種の無名のむなしさが漂っていた。

「生生流転」には、上昇の絶頂にふと奈落の底をみせつけられるような、名状し難い空虚感が大きく口をひらいている。この空虚な洞窟を、何処より来て何処へ往くを知らぬ無意識な音声が過ぎる。その声は何か。不思議な情緒を伴うのである。それは淡く悲しげに見えて実は強靱な粘液性を帯び、人間はおろか非常の草木にまでねっとりからみつく。からみつかれたものは人間・草木も禽獣も自ら無常の哀音を発し、永劫の世界に翻弄されてしまう^⑩。

⑨ 岡本かの子 『岡本かの子全集 第十巻』 ちくま文庫 三四〇頁

⑩ 亀井勝一郎 「川の妖精」 『岡本かの子全集 別冊二巻』 冬樹社 二六頁

岡本かの子は無常を肯定はしているものの、無常観はおそらく常時彼女の意識と無意識との間に遊走しているようであった。そして、年をとるにつれて彼女の無常観は日々に意識化し、それを更に彼女は小説によって具体化したのではないかと考えられる。まず、無意識からこれを捕らえてみると、「無意識（普遍的無意識）は個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に普遍的なものである。このような人類一般に共通のものに至るまでに、ある家族に特徴的な家族的無意識とか、ある文化圏に共通に存在する文化的無意識などを考えることもできる」。^⑪

岡本かの子は生家や日本の独自の文化や修業によって、無常観意識が彼女の無意識から意識にまで変遷しつつ、そして岡本かの子の創作のエネルギーになったという。なぜかというならば、「心的エネルギーは、心の中をたえず流動している。自我は心の内部にある心的エネルギーを適当に消費し、それは睡眠中や休憩中に補給される。心的エネルギーが無意識から意識へと向かう時をエネルギーの進行、逆に意識より無意識へ向かう時を退行と呼んでいる」。^⑫

かの子の無常観についての概念が日々に意識化しつつあるものの、人間としての彼女はこの常にない無常の世に対して、何かを捕らえようと思って必死にもがいても、ついには何も捉えられなかった。したがって、「永遠に自分のまことの生命を生かしきる法、人間性の全部を一番価値的に使い切る法」として仏教を研究し、生命に関する認識を求めたものに、彼女の文学作品では「老妓抄」があり、その中で年をとった生命力の強い園子が持っている矛盾と憧憬、「家霊」では、家の職業に絡まれたくめ子の外の世界に対する憧れなど、これらの描写は皆彼女の潜意識化

⑪ 河井隼雄 『無意識の構造』 中央公論社 三三頁

⑫ 河井隼雄 『無意識の構造』 中央公論社 四八頁

にある矛盾、無常についての意識化である。

にもかかわらず、人間の肉体を水に比し、人間の思想と業や因縁の形成を土に例えるかの子の無常感は、要するに水でも土でも大自然であり、大自然より生まれ、そして大自然に帰し、双方それをはっきりと分けられるものではないというのが彼女の説であった。「生々流転」で安宅先生が「蝶子さん（かの子自身のこと）、あなたは無性格な水の性、土によってのみ性格を規定されます」と言っていることからその一端を窺い知ることが出来よう。言い換えれば、元来無性格の人間であるべきかの子が大貫家の寅吉と愛子の長女として生まれ、そしてかの子は生まれついてその家の業と後天的な因縁（結婚・愛情・私生活・性格など）によって、それを土として受け継ぎ、それがその後の岡本かの子の人間形成に資したわけである。そして、彼女自身が感じた人生の矛盾や生の疲れから来る諸行無常の人生観は、ついに一生を通じて避けることが出来なく、いくらもがいても解決できない、不明の巨大の怪物と化し、一生彼女に付きまとい離れないものとなった。そしてそれが彼女の一生を通じて、特に結婚の破綻後の他人には理解に苦しむ三角・四角関係の波らんに富んだ晩年の彼女を作り上げ、またそれが彼女をして文学に全霊を打ち込む原動力となったのではないかと思われる。

永劫の昔からそれ自ら疑問し来り、永劫の未来へ向けてそれ自ら疑問し去る謎の天地、謎の人生。解決と完成は人生の習性のみにあって、向こうに在るのではございますまい。解決や完成は、人間が局部の限界で墨縄を張るのもございましょう。遂に終わりという事を知らない人間の歴史は、未完成は完成の始まりで、完成は未完成の発足点であるという連鎖の不分明を教えているようでございます。^⑬

⑬ 岡本かの子 『岡本かの子全集 第七巻』 ちくま文庫 四〇一頁

岡本かの子に対して、無常はついて離れないものである以上、人間として生まれ、母なる大地に育まれた人間は、この世で最後に従うのが「土」であり、ただ宿命という目に見えない糸に手繰られてついに生を終える。これはかの有名な『平家物語』の巻六「入道死去」のくだりに出てくる清盛の死を描く表現に「身はひとときの煙となって都の空に立ち上り、しかべねはしばやすらひて、浜の砂にたはぶれつつ、むなしき土と」のくだりと異口同音の思考形態である。人間はいつか死に直面するのは決まったことであり、誰もが免れられない事である。これがかの子の言う「滅びる」という事であった。しかも、この滅びは自らの意志によって決まったものではないが、人間は滅びによってはじめて救われると彼女は言う。かの子に対して「定めなき世に生きる人間は、究極において生の安定を願い求めんとする。それは時に解決であったり、完成であったりするが、所詮人間の狭い知恵による一部の解決や完成にすぎず、依然として一切は諸行無常の流れの中に包摂されているのだ。救いがあるかと言えば無いと答えるほかはない。しかし人間は無常な存在では有るが、実はこのなかに宇宙の意志が開顕されており、一切衆生は仏の慈悲に救いとられているのである。」^⑭

四、結び

無常観という意識は誰もが多かれ少なかれ持っている。ただかの子の場合、それが他人より強いということである。かの子の世の中の物事に対する反応は人より激しく、とくに旧家のデカダンス傾向の影響はややもすれば、彼女のヒステリーを引き起こす一因ともなった。これは彼女の性格に起因することは言うまでもない。嘗

⑭ 古屋照子 『岡本かの子 華やぐいのち』 沖積社 二八八頁

て彼女のわがまを許した夫の一平も、「彼女は人より倍以上の情熱を持っている」と常に他言をはばからない。

ナルシシスティな人にとって何より大切なのは、自己評価の保持、しかもその評価の基準は、幼児期の誇大的なイメージに基づく理想的な自分です。ですから、それこそすべてが自分の思いどおりに行っていない限り、現実の自分の評価が極端に下降し、理想の自分との間のギャップはますます開いてしまいます。その結果、思いどおりに行っている間は強いのですが、いったんつまずくと、抑うつ気分、ヒポコンドリー、憤怒、「栄光の」孤立などが簡単に起こります。^⑬

岡本かの子は旧家の箱入り娘として生まれ、両親や乳母などから溺愛され、いつの間にかエリート意識の持ち主となり、タイラントの性格を形成した。したがって、彼女は世の中の諸々のことに対する感受性は、それがややもすれば自己中心的になり、ちょっとした事でも気に食わないと、それを「無常」という感覚で解釈したものであった。果たしてそれが仏教からきた無常観であるのかははなはだ疑問の残るところであろう。

にもかかわらず、これこそが岡本かの子文学の真髓であり、かの子独自のすばらしい文学を作り出した原動力であった。つまり、文学は彼女にとっては心の中の鬱憤のはけ口であり、ストレス解消の糸口でもあった。それゆえに彼女は文学に心血を注ぎ、いのちをかけて書きあげた。しかも、彼女の心の中の鬱憤やストレスがたまればたまるほど、即ち苦しければ苦しいほど彼女の文学の花が美しく咲いた。これが彼女の文芸感であり、芸術観でもあった。

⑬ 丸田俊彦 『痛みの心理学』 中央公論社 一三五頁

文芸作品中把人生的各種事情象徵化，並表現出人生中的苦惱與困難，……。芸術，絶対地は表現也是創造，而不是自然的再現和描繪。所以如果不是隱伏在潛在意識深处的苦悶—即心靈創傷的象徵化作品，就不是偉大的芸術。……所謂深入描写…是作家深入自己的心靈深处挖掘，達到自己心靈的深处，然後在那裏產生出芸術來。掘得越深，作品便越崇高、越偉大、越有力，看來像是被深入描写的客觀事物之内部，其實正是作家自己的心靈深处。……正因為作家是出於極度的忠実，想把客觀的形象照樣地再顯現出來，所以從他的無意識心裏深处と所表現出來的自我和個性，才会合理地、完全地照自然的樣子表現出來。…所以生命的苦悶才能発洩，才能自動地象徵化，把「心靈」變成了「形象」而表現出來^⑬。

一般大衆の目から見て彼女の人生の遭遇はそれほど苦しいものではないと思われるかもしれないが、彼女自らの物事に対する反応の強さや鋭敏な感受性は、それを無常観と結びつけ、人一倍にそれを増幅し激しく感じていた。それによって、彼女が描写した無常観の文学は、一見積極的に見えるようで、そして悲しそうであるが、同じ無常観でもかの子と同じく苦難のなかで自己を完成した中国の蘇東坡の

明月幾時有、把酒問青天，不知天上宮闕、今夕是何年。我欲乘風歸去、惟恐瓊樓玉宇、高处不勝寒。起舞弄清影，何似在人間。

轉朱閣低綺戸，照無眠。不応有恨何事長向別時圓。人有悲歡離和，月有陰晴圓缺，此事難全，但願人長久，千里共嬋娟。（「水調歌頭」より）

とは、次元を異にするように感じられる。宇宙人生において、欠点や不如意など

⑬ 厨川白村 『苦悶の象徵』（中国語訳版 林 文瑞訳） 志文出版社 三〇頁

は付き物であり、達観の態度を持って世の中の物事に対応することは、われわれが常に無常観に対して持つべき態度ではないかと思う。従って喜怒哀楽を超越する「達観」的考え方は、かの子文学が理解に苦しむものであると考える要因である。

参考文献（五十音順）

- 1、岩崎呉夫 『芸術餓鬼―岡本かの子伝』 七曜社 1963
- 2、江刺昭子 『女の一生を書く―評伝の方法と視点―』
日本ディタースクーレ出版部』 1994
- 3、岡本太郎 『一平かの子―心に生きる凄い父母』
チクマ秀版社 1994
- 4、岡本かの子 『岡本かの子全集』 第一巻～第十二巻
ちくま文庫 1994
- 5、岡本太郎 『母の手紙』 チクマ秀版社 平成七年
- 6、亀井勝一郎 「川の妖精」 『岡本かの子全集 別冊二巻』 冬樹社
- 7、河井隼雄 『無意識の構造』 中央公論社 1997
- 8、西田正好 『無常の文学』 塙書房
- 9、林 克明訳 『日常的心理分析』 志文出版社 1970
- 10、長谷川秀紀 『日本の古典名著』 自由国民社 1994
- 11、古屋照子 『岡本かの子 華やぐいのち』 沖積社 平成八年
- 12、分銅惇作 『近代文学論の現在』 蒼丘書林 1998
- 13、丸田俊彦 『痛み心理学』 中央公論社 1989
- 14、水田宗子 『女性の自己表現と文化』 田畑書店 1993
- 15、山下悦子 『「女性の時代」という神話』 青弓社 1991

16、山下悦子 『日本女性解放思想の起源』 海鳴社 1988

17、厨川白村 『苦悶的象徴』 (中国語訳版 林 文瑞訳)

志文出版社 1979

18、楊 敬豊 『仏学と哲学』 頂淵文化事業出版